
帽子と遮断機と思い出

守山みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帽子と遮断機と思ひ出

【Nコード】

N0927X

【作者名】

守山みかん

【あらすじ】

暑い夏の日、駅のベンチで電車を待つマキオは、子供の頃に経験した、苦くも懐かしい光景を観ることになる。
他の投稿サイトにも掲載しています

ここは、とある田舎の町。

マキオは、駅へと続く坂道を、汗だくになりながら上っている。

桜の並木道。

春先には桃色の見事なアーチを築き上げるのであろうが、今は猛暑の夏。

一面の緑。

桜の特徴が見極めにくい時季。

耳鳴りのように響く蝉の合唱。

アスファルトの路面から照り返してくる高熱。

マキオは、何度もかぶっている帽子を外しては、額にたまった汗をふく。

だが、いくら拭っても吹き出る汗にはキリがなく、二枚目のハンカチさえも、乾いている部分を使い切ってしまう。

汗は、頬の無精ひげの間を縫うように掻い潜り、額の先へ集まって、雫となって落ちる。

マキオは顎を突き出し、前のめりの姿勢で歩く。

まるで、磁石に吸い寄せられる釘のように、マキオは駅舎の前の自動販売機に近寄っていく。

この炎天下でも、自動販売機は元気に営業している。

機械というものは、愛想はないが、辛抱強い点は大いに評価できる。

マキオは、小銭入れから百二十円を取りだし、乳酸系の大きなサイズのドリンクを買う。

ひんやりと冷えた、みずみずしいドリンク缶の姿をしていたのは、ほんの十秒足らず。

たちまちドリンク缶は水分を吸い取られ、大したことのない握力でクシャクシャに握りつぶされてしまう。

水分を補給し、少しだけ氣力を回復したマキオの心に、ゆとりが生まれる。

マキオは、近くを飛ぶトンボを目で追ってみる。
細長い胴体がラベンダー色の、小振りのトンボ。
確か、シオカラトンボ。

マキオは、このトンボを捕まえてやろうと、動きに注意する。
そこへ、踏切の警報が大きな音で鳴り響く。

トンボはあちらこちらと、止まっては、飛び立ち、止まっては、飛び立ちを、繰り返している。

苛立ちながら、マキオはトンボを追いつける。

トンボは、遮断機の竿の先にピタリと止まり、小休止する。

マキオは、そろりとトンボの背後に回る。

右手の人差し指と親指で、トンボの羽を挟んでやろう。

トンボは、全くマキオの氣配に氣付いていない。

だが、不運にも列車が到着し、トンボとマキオに突風を浴びせる。

驚いたトンボは飛び上がり、民家の屋根の上へと逃げていく。

マキオは、悔しがる。

そのマキオに対して、また別の不運が降りかかる。

上がろうとしていた遮断機の竿の先が、マキオの帽子のツバに当たり、帽子は高々と放り上げられてしまったのだ。

マキオは、茫然と帽子の行方を見守ったが、帽子は遮断機の先に引っかけり、そのまま落ちてきそうもない。

その様子を見ていた駅員が、マキオに向かって話しかけてきた。

「ツイてないねえ。でも、二十分もすれば、反対方面の列車が来るから、その時に遮断機は下りてくるよ」

マキオは、その反対方面の列車に乗るつもりだったので、駅員の提案に、素直に頷く。

単線のプラットホームに人影はなく、マキオはイチヨウの木陰のベンチを、一人で占有する。

頭上の大量のイチヨウの葉が、殺人的な太陽光線から、マキオを守ってくれている。

先ほどの灼熱地獄が、まるでウソのようだ。

心地よい風が頬を撫で、あれほど掻いていた汗も収まっている。

遮断機の先の帽子は、風で踊っていたが、なかなか落ちてきそうで、落ちてこない。

子供のはしやぎ声。

線路の向こう側に、猫の額ほどの敷地を利用した小さな公園があり、親子連れがサッカーボールを蹴り合って遊んでいる。

公園脇にある藤棚をゴールに見立て、ガツチリした体格の父親が、ゴールキーパーよろしく、小さなストライカーを前に、立ちほだかっている。

「いくよ！」

子供は、勢いよく助走をつけ、ありったけの力を込めて、サッカーボールを蹴り飛ばす。

だが、父親はいとも容易に、そのたくましい両腕でボールをキャッチする。

「クソ、今度こそ！」

子供は、何度も父親に挑む。

父親は、その挑戦をことごとくはねのけ、ただの一度も、ボールが藤棚のゴールに突き刺さることはなかった。

「父さん、手加減してよ」

子供が甘えた声を出す。

父親は、余裕の笑顔を浮かべている。
容赦するつもりはないらしい。

「ダメだ！ これは男の勝負だ。三本決まったら、お前に新しいシューズを買ってやる。それができないなら、まだしばらく古いので我慢するんだな」

「そんなあ。父さん、強すぎるよ」

犬の鳴き声が、子供に加勢する。

鉄棒の支柱に紐でくくりつけられた柴犬。

子供の意見に同調しているかのように、父親に向かって盛んに吠え続けている。

「わかった。じゃあ、次の一本が決まったら、買ってやる」

子供と犬の説得に墜ちた父親は、しぶしぶ条件を緩和する。

子供は「やったあ」と喜び、犬に向かってウインクする。

犬は「ワン」と、一声吠えて答える。

マキオは息を吞んで、その光景に見入っている。

すべてが、記憶の片隅にある出来事だった。

胸が締め付けられるような、忘れがたい思い出。

マキオにはわかっていた。

次のシュートが決まるのかどうかも。

子供の蹴ったボールは、父親のガードこそ逃れはしたものの、柵のポールに当たって、惜しくもゴールを外してしまった。

「残念だったな」

父親は、転がるボールを拾い、子供に向かって、緩く放り投げる。
子供は、しょぼくれた顔でボールを掴む。

「シューズは、かなり傷んでいるのか？」

情に負けた父親が、子供に訊ねる。

子供は、静かに首を縦に振り、鼻をすする。

父親は、大きな手のひらで子供の肩を、優しく叩く。

「一週間は母さんの手伝いをしろ」

「母さんの？」

「おつかいとか、部屋の掃除とか、花壇の水やりとか、お前にできることもあるだろう」

「それをやったら、シューズを買ってくれるの？」

子供の目が輝く。

父親は頷くと、子供のいじけ顔が一転して笑顔に変わる。

「今、すぐにだぞ」

父親が念を押すと、子供は「わかってるよ」と大きな声で返事し、並木道の方へ駆けていく。

残された父親も犬の紐を取り、子供の後に続こうとする。
そこへ、マキオが前を塞ぐ。

「キミは？」

父親が怪訝な顔をして、マキオに訊ねる。

「お願いがあります」

マキオは、丁寧な口調で言うと、今にもすがりつくような目で、父親を見た。

「この並木道には、両側に歩道がありますが、その右側を歩いてほしいのです」

「右側を？」

父親は、首を傾げる。

「なぜ、そんなことを言うのかな？」

どうやら、変人に思われたらしいが、マキオはそれを承知の上で、更に父親に訴えかける。

「知ってるんです。これから、あなたの身に何が起こるのかを。暴走車がすごい勢いで、この道路を走ってきて…信じてもらえないでしょうけど、ボクはあなたのことを…」

マキオは、言葉を詰まらせる。

強烈な嗚咽が彼を襲い、言葉を遮ったのだった。

「なるほど」

父親は微笑し、先ほど子供を慰めたときと同じように、マキオの肩を優しく叩く。

「キミの言いたいことは、よくわかった。要するに、キミは私を助

けたいわけだ。そうだろう?」

父親の問いかけに、マキオは全力を振り絞って、ようやく頷くことができる。

「ありがとう」

父親の言葉は優しくかった。

実の子共を相手にするように。

マキオの目から、止めどもなく涙が溢れ出る。

父親はハンカチを取り出すと、マキオの濡れた頬を、丁寧に拭き取る。

マキオの目は、少年の頃のものに戻っていた。

敬愛の眼差し。

それは、マキオの心の中にだけ生きているはずの人物に向けられるべき、眼差しであった。

犬が、マキオに撫でてくれとなついてくる。

マキオは耳の裏の辺りを、前から後ろへ流れるように撫でる。

「ペス」

と、マキオは犬の名を呼ぶ。

犬は、尻尾を振って喜ぶ。

「キミには悪いが」

と、父親は犬の紐を引き、マキオに背を向ける。

「キミが言う右側の桜並木は、ここへ来るまでに観てるんだ。だから、帰りは左側の桜を観ながら帰るつもりなんだ」

いつの間にか、濃緑だった並木道が、桃色のアーチとなり、遙か前方へと続いていった。

灼熱の暑さもどこかへ去り、穏やかな春の陽が差していた。
父親の足が、左側の歩道を一步步踏みしめ、遠ざかっていく。
父親がハミングする『知床旅情』のメロディが、優しく耳に入る。
幼い頃から、マキオの心に残っている歌。
それは、嫌というほど聞かされた経験があるからだった。
父親の後ろ姿が小さくなっていた。
だが、メロディはいつまでもマキオの心から消えなかった。
それが父親とペスの姿を見た、最後の瞬間だった。

- - - - -カン、カン、カン

鐘を叩くような音と共に、父親とペスは消え失せる。
桜の花も緑と変わり、暑苦しい蝉の声が、再び聞こえ始める。

「お客さん、列車が来ますぜ」

駅員の呼ぶ声。

マキオはハツとして、ベンチから立ち上がる。
鐘の音は、踏切の警報音だった。

遮断機は、すでに下りていた。

駅員は、すでにマキオの帽子を手に入っていた。
マキオは、急いで駅員のそばへ駆け寄った。

線路脇の小さな公園に、親子連れの姿は、もう無かった。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0927x/>

帽子と遮断機と思い出

2011年10月9日16時00分発行